

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和元年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第3号（6月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

☎099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jppn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

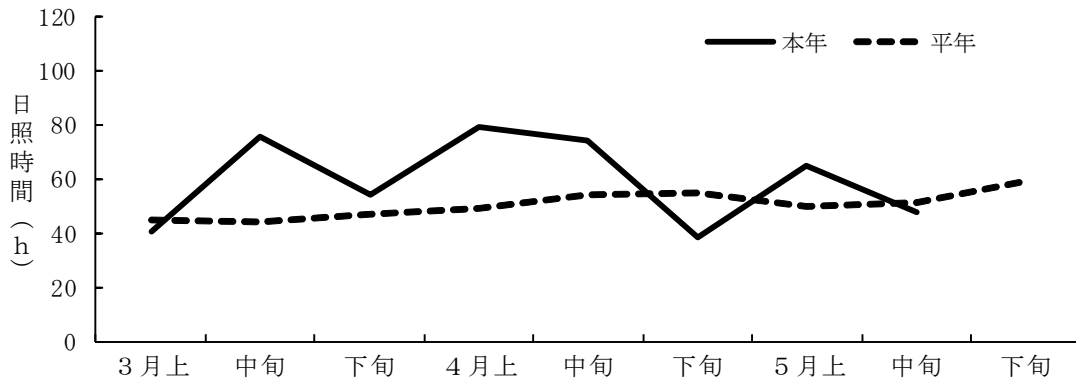
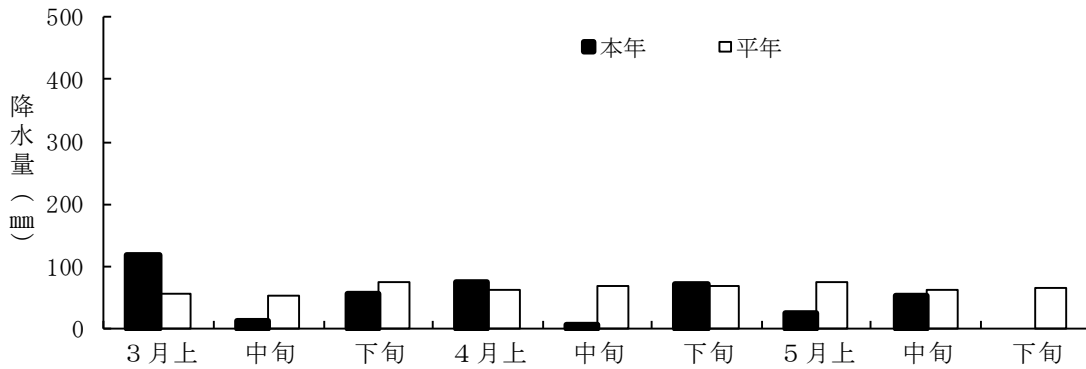
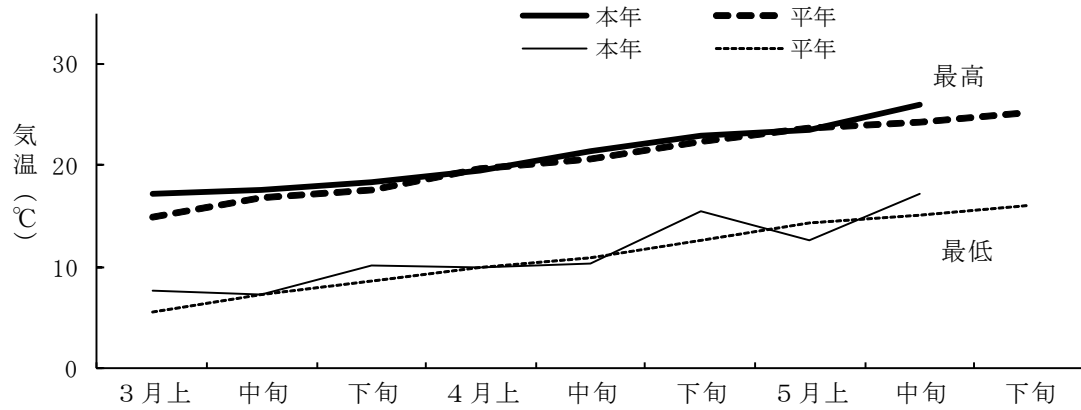
農薬ラベルを確認しましょう。
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（6月1日から6月30日） 令和元年5月30日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	30	60	九州南部では、気温は高く、降水量は平年並みか多く、日照時間は平年並みの見込み。 奄美地方では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は平年並みか少ない見込み。
	奄美地方	20	30	50	
降水量	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	20	30	50	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	40	20	

II. 3～5月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	早期水稲	いもち病	やや少	やや少
		紋枯病	並	並
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土）	並	やや多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
	ナシ	黒星病	並	並
		ハダニ類	やや多	やや多
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		輪斑病	やや少	並
		もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	少	やや少
		チャノホソガ	並	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多
		チャノキイロアザミウマ	少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) いもち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 2%)

：やや低い (-)

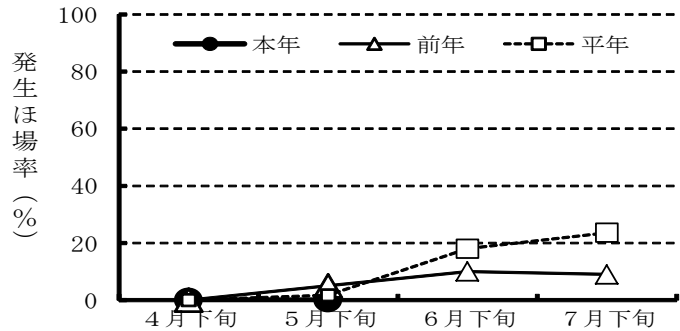
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 葉いもちの発生が穂いもちの発生につながりやすいので、早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。

(イ) 出穂期が梅雨期間にあたるので、常発地では粒剤による予防散布が効果的である。

(ウ) 穂いもち防除は穂ばらみ後期に行うが、時期を失しないよう注意する。

(エ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



いもち病の発生ほ場率 (早期水稲)

(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 0%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

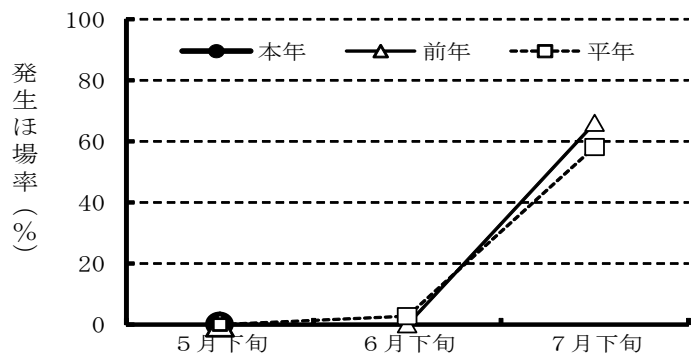
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除は上位葉鞘への進展期にあたる出穂 1 週間前から出穂期頃に行う。

(イ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

(ウ) 過繁茂状態の水田では、発生が見られたら病勢の進展に注意する。

(エ) 前年に多発した水田では特に注意する。



紋枯病の発生ほ場率 (早期水稲)

Ⅲ. 花き（キク）

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率28%（平成31%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

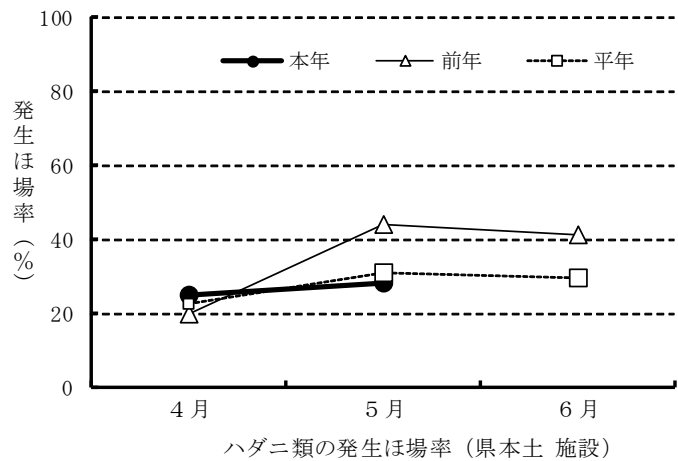
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等

でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように十分量を散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率22%（平成27%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(T S W V)、キク茎えそ病(C S N V)を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および初期防除に努める。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。

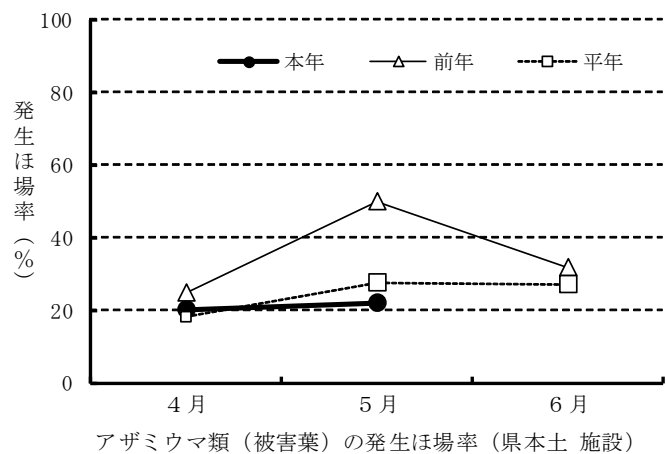
(ウ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(エ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(カ) 6月頃からクロゲハナアザミウマの発生が目立つようになる。本種は中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 並

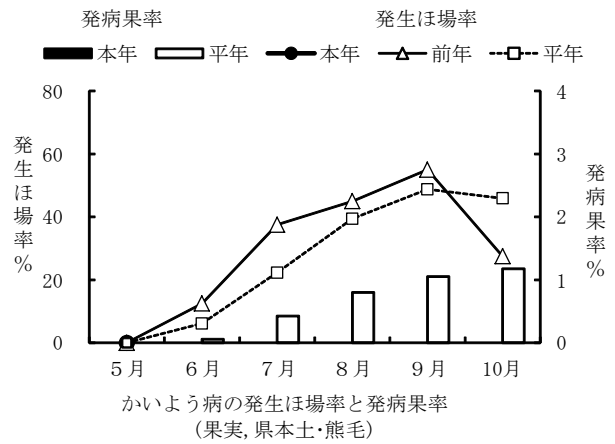
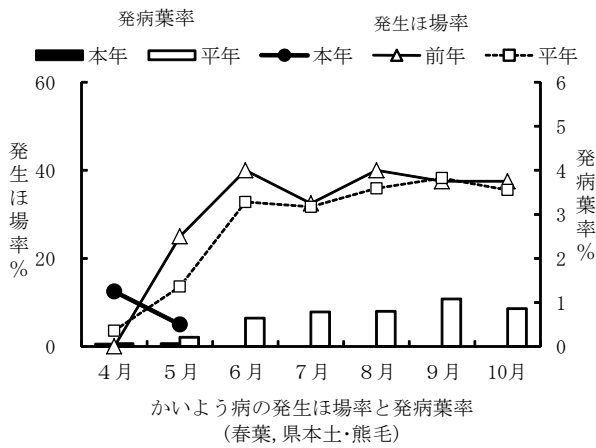
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	5 % (平年 14%) : やや低い (-)	0 % (平年 0%) : 並
発病率	0.1% (平年0.2%) : 並	0 % (平年 0%) : 並



(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	少	並
発生ほ場率	0 % (平年 20%) : 低い (-)	0 % (平年 0%) : 並
発病率	0 % (平年0.3%) : 低い (-)	0 % (平年0.0%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 梅雨期の強い風雨による風傷害で発生が多くなるため、梅雨期前に防除を行う。

(2) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率 28% (平年20%)

: やや高い (+)

寄生葉率1.0% (平年1.5%) : やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか多い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率0% (平年3%) : 並

寄生葉率0% (平年0.2%) : 並

(イ) 気象予報

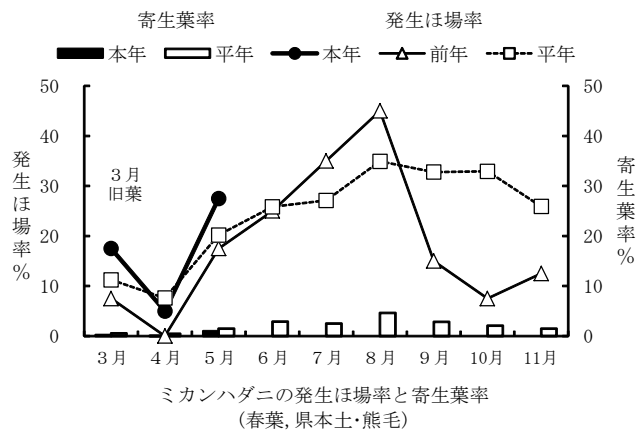
気温：高い (+)

降水量：多い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期~夏期にかけては、マシン油乳剤(97%)を主体とした防除を行う。



2. ナシ

(1) 黒星病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果(葉) 発生量：並

発生ほ場率(葉) 88% (平年79%)

: やや高い (+)

発病葉率(葉) 2.5% (平年6.8%) : やや低い (-)

果実での発生が少ない (-)

(イ) 気象予報

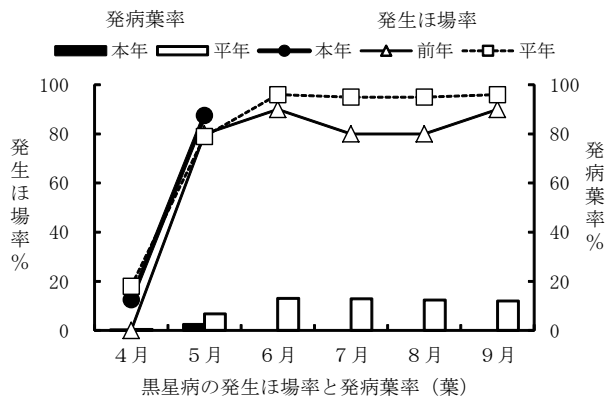
気温：高い (-)

降水量：平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除は新梢伸長期までを重点に、約10~14日間隔で予防散布を行う。なお、薬剤散布は天気予報に留意し降雨前に行う。

(イ) 耐性菌の発生リスクが高まるので、同一系統薬剤(SBI剤等)の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

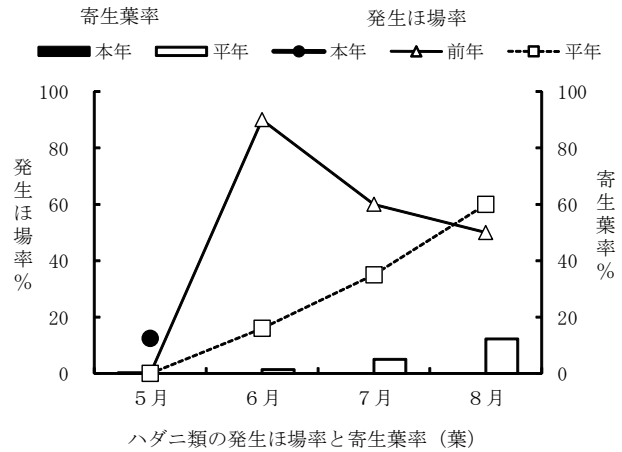
- (ア) 調査結果(葉) 発生量：やや多
発生ほ場率 13% (平年 0%)
：高い (+)
寄生葉率 0.3% (平年 0%)
：高い (+)
発生程度が低い (-)

(イ) 気象予報

- 気温：高い (+)
- 降水量：平年並みか多い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤による防除は発生初期に行い、葉裏や徒長枝にもかかるよう十分量散布する。
- (イ) 抵抗性の発達を防ぐために、同一薬剤、同一系統の薬剤の使用は年1回とする。



防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

- ア 本病は落花直後～梅雨期に感染が多くなる。
- イ 薬剤散布間隔は、散布からの累積降水量250～300mmを目安とする。
- ウ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) チャノキイロアザミウマ

- ア 被害が問題となるのは第2世代以降で、発生は特に6月が多い。
- イ 防除は第2世代以降、発生ピーク日の10日前から発生ピーク日までに行う。

表 成虫の発生ピーク予測日 (5月30日予測)

世代	阿久根		さつま柏原		川内		東市来		鹿児島		加世田	
	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年
2	6/5	6/1	6/8	6/4	6/6	6/1	6/1	5/28	5/21	5/19	5/27	5/24
3	6/29	6/25	6/30	6/27	6/28	6/25	6/26	6/20	6/14	6/12	6/21	6/17

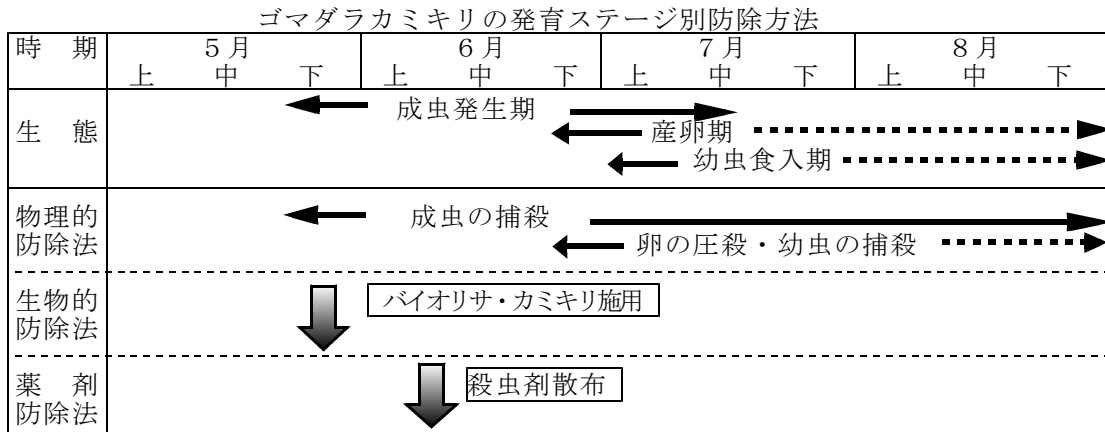
世代	枕崎		指宿		志布志		鹿屋		肝付前田		内之浦	
	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年
2	5/26	5/23	5/27	5/23	6/1	5/30	5/31	5/29	5/28	5/28	5/27	5/28
3	6/20	6/16	6/20	6/16	6/25	6/24	6/24	6/22	6/22	6/22	6/21	6/22

注) 予測は(社)日本植物防疫協会のJPP-NETの有効積算温度計算シミュレーションversion2により行った。

有効積算温度予測に用いた気温はアメダスの観測値で1月1日を起算日とし、本年5月30日以降は平年値を使用した。

(3) ゴマダラカミキリ

- ア 成虫は5月下旬から発生し，6月上旬～中旬が羽化最盛期になる。
- イ 産卵は6月中旬頃から始まり7月上旬が盛期で，8月まで続く。
- ウ 朝夕，成虫の活動がにぶい時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。
- エ 樹冠下の除草は，産卵防止に効果的である。
- オ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断（ストックカバー法）すると，成虫の産卵を防止できる。



注) 県本土の発育ステージを示す。

V. 茶 樹

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率31% (平年34%)：並

1 m²当り病葉数1.8枚 (平年5.5枚)

：やや少 (-)

定点無防除園での病葉数 (5月中旬)

23枚/m² (平年54.1枚)：やや少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 摘採残葉での発生に注意し、発病葉の多いほ場では二・三番茶生育初期の防除を行う。

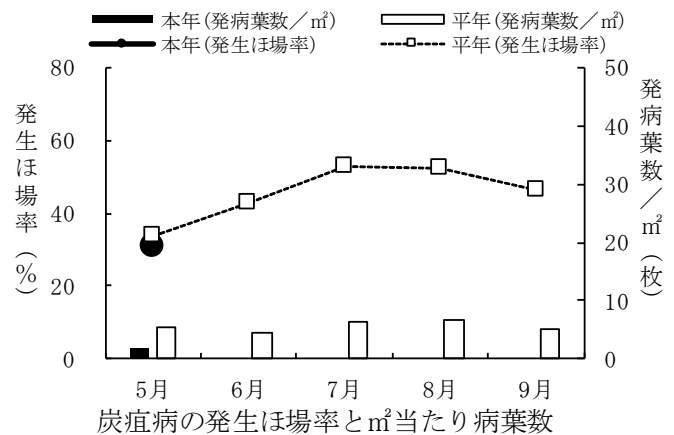
(イ) 二・三番茶芽の上位葉は収穫されるが、摘採残葉として残る下位1～2葉を守るために萌芽～1葉期に予防防除を行う。

(ウ) 二・三番茶の生育期に降雨が続く場合は、感染・発病に十分注意する。

(エ) 「やぶきた」等の本病に弱い品種は発生に注意する。

(オ) 二・三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期 (摘採前日数) に注意する。

(カ) 多発状態の続く茶園では整・剪枝 (深刈り等) により伝染源を除去する。



(2) 輪斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0% (平年2%)

：やや少 (-)

1 m²当り病葉数0枚 (平年0.2枚)：並

定点無防除園での病葉数(5月中旬)

0枚/m² (平年1.4枚)：少 (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか多い (+)

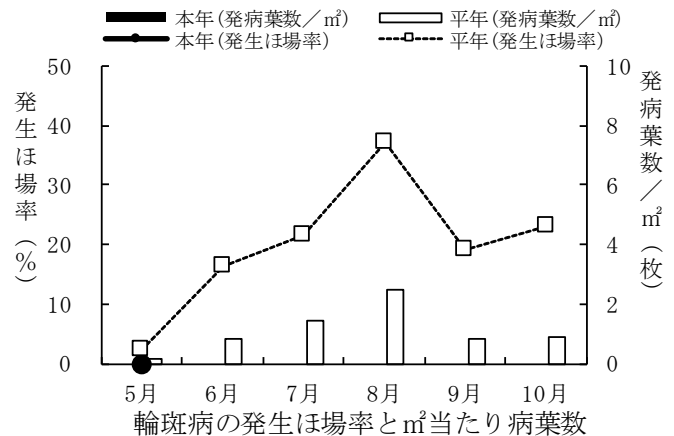
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二番茶の摘採期に降雨が多い場合は、感染・発病に注意する。

(イ) 防除薬剤に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透移行性の薬剤を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

(ウ) 摘採直後に防除できなかった場合は、摘採7日後までに整枝または刈番茶を摘採し、その直後に防除を行う。ただし、降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。

(エ) ストロビルリン系薬剤耐性菌の発生が確認されている地域では、本系統薬剤の使用を避け、未発生の地域でも使用は年1回とする。



(3) もち病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率0% (平年2%)：やや少 (-)
1 m²当り病葉数0枚 (平年0.2枚)：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉の多い茶園では、三番茶生育初期に炭疽病との同時防除を行う。
- (イ) 多発生すると摘採葉中に病葉が混入し、製茶品質の低下をもたらすので、早めに摘採し、被害を回避する。
- (ウ) 常発園では風通しを良くし、陰湿状態を改善する。

(4) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 並
チャハマキ やや少
- (ウ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ やや遅い
チャハマキ 早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 (チャハマキの越冬世代誘殺数は3月第1半旬～5月第4半旬の合計)

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	並	少
発生ほ場率	13% (平年 12%) : 並	5% (平年 14%) : 低い (-)
虫数 (1 m ² 当り)	0.2頭 (平年0.2頭) : 並	0.1頭 (平年0.3頭) : やや少 (-)
【定点調査】		
越冬世代の50%誘殺日	4/22 (平年4/19) : やや遅い	発蛾最盛日4/5 (平年4/11) : 早い
越冬世代誘殺数	415頭 (平年597.0頭) : 並	1,228頭 (平年593.5頭) : 多 (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤防除を行う場合、防除適期は発蛾最盛日の7～10日後 (ふ化～2齢期) である。
- (イ) 摘採との関係で、適期防除ができない場合は、摘採後早めに防除を行う。

(5) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並
- (ウ) 発生時期 やや早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率10% (平年6%)：並
1 m²当り葉巻数0.2枚 (平年0.4枚)：並
定点ほ場での越冬世代の誘殺数 632頭 (平年684.2頭)：並

定点ほ場での越冬世代の50%誘殺日3/28（平年3/31）：やや早い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二・三番茶期は、萌芽～1葉期に防除を行う。

(イ) 二・三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。

(6) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多
チャノキイロアザミウマ やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果(5月中旬)

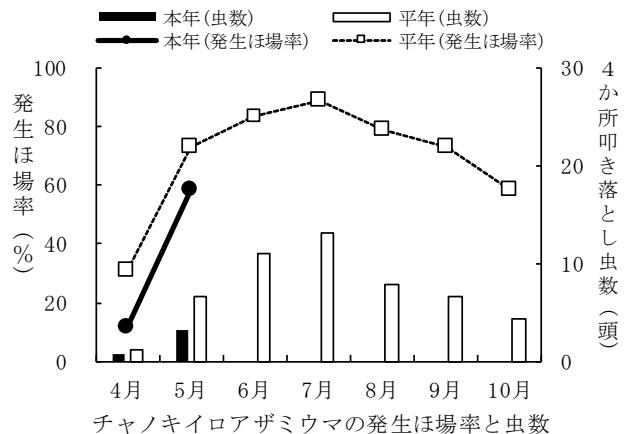
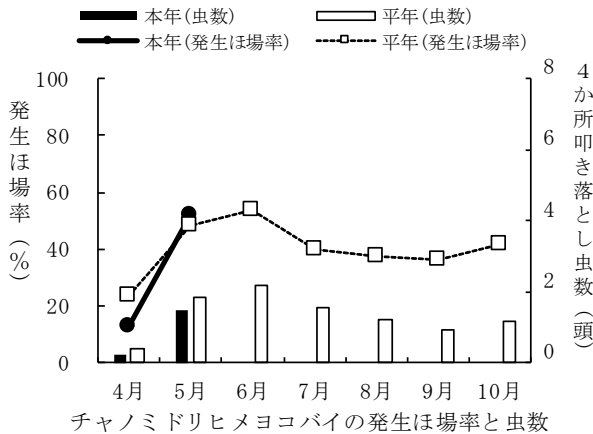
	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	並	少
発生ほ場率	52% (平年 49%) : 並	59% (平年 73%) : 低い (-)
虫数(4か所叩き落とし)	1.5頭(平年1.8頭) : 並	3.2頭(平年6.6頭) : やや少 (-)
【定点調査 無防除園】		
虫数(50回すくい取り・叩き落とし)	0頭(平年2.9頭) : 少 (-)	1頭(平年7.0頭) : 少 (-)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、二・三番茶萌芽期の防除が必要であるが、摘採後も摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後の防除も有効である。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。